

救急画像ティーチングファイル

Daniel B. Nissman ● 編
船曳知弘 ● 監訳

〔評者〕野田英一郎(福岡市民病院救急科科長)

本書は米国の放射線医によるティーチングファイル集を翻訳したものである。ティーチングファイルとは放射線科による教育方法の1つとされており、典型的な画像、めずらしい画像を集積し、学生や研修医教育だけでなく、放射線科レジデントや非放射線科専門医に読影のポイントなどを指導する際の症例集である。日本でも放射線科医の常勤する病院の多くで、症例集までは作らずとも、勉強会などで取り入れられている手法と思われるが、原著出版社の序文によれば、本書のような包括的なティーチングファイルの出版はアメリカでもめずらしいそうである。

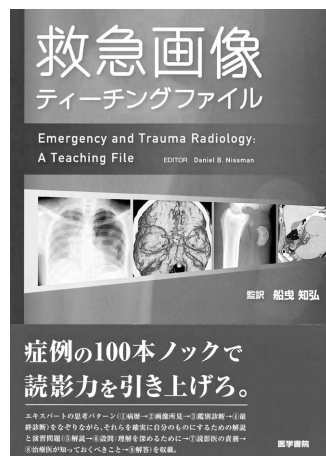
監訳者の船曳知弘先生は日常診療の傍ら、DMAT 隊員として災害時対応、教育、また JPTEC, ITLS, JATEC, ICLS, JMECC, MCLS など、救急関係の各種 off-the job トレーニングコースの世話人やインストラクターを務めるとともに、放射線科領域でも DIRECT 研究会を主催し、世界中から救急 IVR での講演を依頼される、日本の救急のみならず、救急放射線科領域を牽引する第一人者である。

しかも数多くの著作の執筆もしてきた船曳先生が選んだ本書が面白いはずがない。そう思って

本書を手にとってみた。目次をみると、この手の書籍によくみられる疾患名や病態による分類がなされておらず、症例番号と主訴のみである。各章は年齢性別、簡単な既往症と現病歴の記載しかなく、いきなり画像が数枚並んでいる。読み進めると診断名、鑑別疾患、読影のポイント、病態の解説、読影医や治療医へのアドバイスまで記載されている。しかも症例はランダムで、疾患別や画像の種類別に並んでいるわけではない。臨床現場で体験しているかのごとく読み進めることができる。

船曳先生も序文で記しているように、診療時に調べるための書籍ではなく、空いた時間を利用して読むのに適している(診察時に調べられるような書籍はすでに船曳先生自身が執筆している、『救急画像診断アトラス』[ベクトル・コア, 2007]。刊行当時、船曳先生は医師10年目そこそこ、30代半ばだったことは驚きである！しかも症例ベースで読みやすい！)。本書には全部で100症例が掲載されており、それぞれが救急外来で遭遇することの多い疾患であり、画像も厳選されている。救急外来を担当する全ての医療人にお薦めの書物である。

残念だったのは症例情報が、上



述した年齢性別と1~2行程程度の簡単な既往症、症状、受傷機転、現病歴だけ(中には交通事故や、胸痛だけの症例も)だったことである。救急外来ではバイタルサイン(異常があれば処置を同時施行)、可能なら問診の後に画像検査を行うことが多いため、この点は原著者が放射線科医で、簡単な病歴や症状が書かれた撮影、読影依頼書を元に読影している現状を表していると想像される。救急医である小生からは、救急医の視点がもう少し入っていればよかったように思われた。ただし、これは原著者の意図であり、翻訳の船曳先生のせいではないことを申し添えておく。

B5・頁304

2019年2月

定価：本体4,800円+税
[ISBN978-4-260-03628-3]

医学書院刊